

尊敬語 確認テスト（古典敬語） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

問1 (帝が御殿に) いらっしゃる・おありになる。「おはします」は「あり・居り／行く／来」の尊敬語で、ここでは存在「いらっしゃる」の意。

問2 いらっしゃる／おいでになる (帝が御殿にいらっしゃる)。

問3 動作主である「大臣」。「おはす」は大臣が宮中へ行く動作を高めているので、敬意は動作主の大臣へ向かう。

問4 言ふ。「のたまふ (宣ふ)」は「言ふ」の尊敬語で、「おっしゃる」の意。

問5 おっしゃる (上が女御に「たいそう気の毒だ」とおっしゃる)。

問6 動作主は「院」。よって敬意は動作主である「院」へ向かう。尊敬語は動作をする人を高めるので、語り手(書き手)から院への敬意を表す。

問7 寝 (ぬ)。「大殿籠る (おほとのごもる)」は「寝・寝ぬ」の尊敬語で、「お休みになる・おやすみになる」の意。

問8 動作主は「中宮」。よって敬意は動作主である「中宮」へ向かう (語り手から中宮への敬意)。

問9 イ 召し上がる。「夜の御酒を召す」で、「召す」は「飲む・食ふ」の尊敬語＝「召し上がる」の意。なお「召す」は「呼ぶ・着る・乗る」など多くの動詞の尊敬語を兼ねる多義語である。

問10 見る。「御覧ず (ごらんず)」は「見る」の尊敬語で、「ご覧になる」の意。

問11 思ふ。「思す (おぼす)」は「思ふ」の尊敬語で、「お思いになる」の意。

問12 深くお思いになる／深くお考えになる。「思し召す」は「思ふ」の尊敬語で、「思す」より敬意が高い。

問13 聞く (また「食ふ・飲む」)。「聞こし召す」は「聞く」の尊敬語で、ここでは「お聞きになる」の意。文脈により「召し上がる」の意にもなる。

問14 四段活用。意味は尊敬(「お与えになる」)。下二段の「給ふ」は「思ひ給ふ・見給ふ」のように連用形に付く補助動詞専用で会話文中心に用いられるが、ここは「織物を給ふ」と本動詞で目的語をとり、地の文で帝の動作を高めているため、四段＝尊敬と判断できる。

問15 動作主は「親王 (みこ)」。よって敬意は動作主である「親王」へ向かう (語り手から親王への敬意)。

問16 (わずらう人を) お労 (いた) わりになる／いたわりなさる。「労り」に補助動詞「給ふ」が付き、「おへになる」の尊敬の意を添えている。

問17 (1) 本動詞(「おはす」が単独で「いらっしゃる」の意の動詞として用いられている)。(2) 補助動詞(「参り」に付いて尊敬の意を添えている)。(3) 本動詞(「給ふ」が単独で「お与えになる」の意の動詞として用いられている)。(4) 補助動詞(「聞き」に付いて尊敬の意を添えている)。

問18 尊敬語。四段活用の「給ふ」は「与ふ」の尊敬語（本動詞「お与えになる」）、また補助動詞として「お～になる・～なさる」の尊敬を表す。

問19 謙讓語。下二段活用の「給ふ」は「思ふ・見る・聞く・知る」などに付き、「～ております・～させていただく」のように自分側をへりくだる補助動詞で、主に会話文（話し手の発話）で用いられる。

問20 本動詞の尊敬語はそれ自体が単独で一つの動詞として用いられるのに対し、補助動詞の尊敬語はほかの動詞の連用形などに付いて尊敬の意味だけを添える点が異なる。

問21 「のたまはす」のほうがより高い敬意を表すとされる。「のたまふ」に使役・尊敬の「す」が加わった形で、最高位の人物などに用いられることが多い。

問22 動作主。尊敬語はその動作をする人（主語）を高める敬語である。